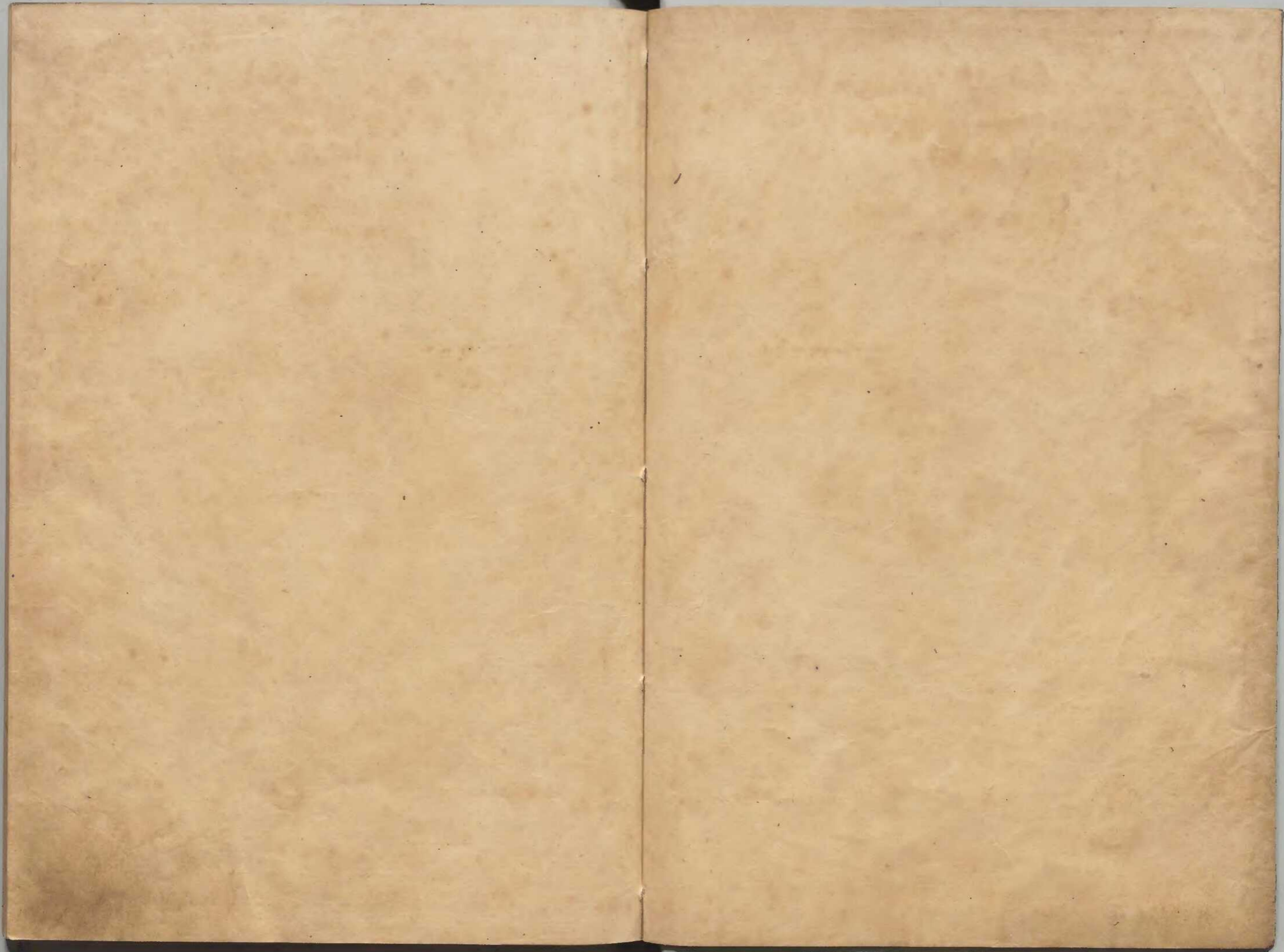


寛永諸家譜

平氏十九冊之内
良文流

内閣文庫			
番號	和	20199	
冊數	186 ('70)		
函號	特	'76	1





奥平

土屋

寛永諸家系圖傳

平氏

良文流

奥平

淺草文庫

先祖村上天皇乃皇子具平親王十
 二代の孫赤松則景安藝國より長任
 一治承元々右大将朝臣宣旨よ
 ともく義吉とあづまるとも、則系
 開東より下向志々々於於より居と

則景二男氏行秩父の族児玉在集
年となくく家督と成りて児玉
在集門と号しと末流上野に自平
の御と成りて上野より自平と
号し累代上野に居住り

貞後

八節 上野尉 生國上野
のち之別より上野に成りて八十

余歳少く死す 法名茶繁

貞久

監物 生國三河 此子と成り
八十一歳少く死す 法名道成

貞吉

監物 生國同前 此子と成り
天文四年四月廿日八十五歳少く

死す 法名通閑

貞勝

監物 生國同家 作手法成と

文禄四年十月九日八十回歳あくる紀と
法名通文

貞能

九八郎 法名成与と号と 生國同家

作手法成と

永禄十二年今川氏去を列 堀川と号と

と記

東照大権現を法ひきひく大権現せめ
あふふ貞能謀をめぐり 和睦乃事

とむとふすくくをを列の法士

大権現より厨一たくす川る

元龜元年六月

大権現作長とすくりんふあし江列

いさぎの合義景が大軍に姉川あく
戦ひ大軍とやがり終ふはとと、貞徳
酒井左衛門尉より居し先登となりて
大り戦ひ首級あり干と得たり

天正元年七月廿日

大指現多氏率とて三列長藤の城攻
せめ終ふとオ、貞徳火矢とてつと二丸
と解く敵は兵とてくよと久むとて
本丸よりいりる中進りしとて同八月

中旬武田勝頼長藤後詰のきあよ兵を
を河三河あまへ流しつと馬場貞徳と五子
余軍とひきひく二山より陣とて
武田左衛門尉等八千余とて
陣とる其利左衛門尉他手は城をまわり
之外田原城を回武田勢し書とて
とひく武田氏は法率解務とて
左馬助右衛門尉等他手は城よりつり
後系より書張しとて

東面より西海とよそへまきこむ

大指現者川筋へ返敷るへ〜皮地

とひ〜雄雄と変と分る此方密談

せ〜むりつち他手に至貞能并り

婿男信昌内通と〜

大指現〜り〜る〜る〜と〜然といへ〜

父子乃か〜云もい〜と〜と〜る〜り

黒敷〜る〜成田庄の助使志まの貞能

と〜誘引と〜夫役〜り〜と〜と〜す〜黒敷よ

河庄の助〜り〜ま〜ゆ〜と〜成田家光

城所通喜の〜り〜皮地〜り〜わの貞能

小む〜り〜い〜と〜い〜る〜

大指現へ内通い〜と〜の〜り〜風雪あり

今日の事條津女なり〜と〜貞能

お〜り〜氣〜と〜な〜と〜く〜明〜る〜時節

各人口區〜り〜父〜と〜ま〜と〜

〜と〜す〜ん〜ハ〜あ〜る〜と〜〜と〜い〜ア〜り〜爰よ

〜と〜ひ〜く〜た〜る〜助貞能と〜と〜と〜る

皆終り二百余所の民家と焼拂ひ
灘より陣取り柵と築くいさぶ
堀とわさくさると敵灘よりせめ
のりといへども貞徳防戦りし敵
もこれえどもきくきりせき討
こころり田原坂よりとひく二三度
返りありせ挑たふふと進りし
武田皆奥平助次郎と介治兵衛
数多討拵敵兵具ととて敗軍と

けり 上同よを

大権現沖感あやうと其後如治少
てな多豊後も同彦次郎と勝淵山よ
とせくもつるも後貞徳此手表よ教
向し敵兵城平よりおと赤羽毛り
敵ふとも貞徳敵の首ぬく討拵も
後貞徳と勝淵よりと兵ひきり
碓田の御と焼もししと敵か討
捕ひお戦場度こころとふ

天正三年十二月十一日六十二歳
て死す 法名牧庵

貞治

友之宗尉

長五年開ヶ原合戦の時

大権現のおかせりしるも使志少く

筑お中納言秀秋乃陣よたむむ

秀秋一内通せしむま敵に戦

首級とけきり終よ先手しり

戦ひ死す

大権現志進成あしれみ江列のうらり

とひく成地と貞治か母りたまふ

信昌

九八郎 後其地と号し 生國三河

他手成候

天正元年七月

大指現三列長藤の城とせられたまふと
軍中へおぼしげます

同三年二月廿八日

大指現信昌より三列長藤の城迄

まの〜む

同年五月朔日武田勝頼長藤城を

せむるにき信昌の〜同十一日

敵源合乃南門より〜せむる

信昌城中より〜おぼしげに

敵敗少

同十三日武田勝頼丸のり

と〜信昌下知と〜射法砲と

敵多負死八百人〜と

同十四日敵ま〜源合の門と圍

と〜信昌城中より〜おぼしげに

〜敵利と〜味方にも負

數十人あり〜父貞能并石川

伯耆守

いづく堅固一城とまらざるを
信長を後追はめあるべきのよし
とほちり出乃て一城中力と
たり歎悔いづるに遠近のよし

同日信長

大指現長藤を急ぐ一りしりる箕原
一陣づつ信長より全委又部八

大指現より酒井左衛門尉なる豊後守
奥平兵衛与貞能より介敷軍部合

兵子余者川より一りしりる一日れある
長藤乃向い鶴堂久間与所の附城よ
しよと攻めし六乃とて貞能と
わち世敵とやがる信長もまう軍功
あり

勝頼兵隊引込

大指現信長とよせたるひとよき柵
より鉄砲とよかつ勝頼兵隊よ取
六の所見信長軍部とよげし信長志

城中に入信留りし向くいと小城中
ありくも大軍小むらひあれを
明くまの功をすくまくり
とく信留が母老殺軍やい
並切ありて後
大控現まるとおかせありて信留一族七人
母老五人やいづれはひび粉骨と
はくまの信留感あり別は例り
よる子孫今りてはま

清和とおとまると他手田原周事寺
若小屋等此小城信留と守り
長藤没落の後古れ忠功りてはま
信長よる西尾小屋と使老と
大控現りてはま
大控現乃婦女とて信留に嫁せり
むらち長藤の城とてはま
忠功の妻とてはま
大控現れ命とてはま長藤田原

老臣田原と経るを介を列乃ら
新部老臣新庄山梨高尾等の地
身多ふまゝ大坂若長光此刀を姉川
合戦のとき信長よりあつた例として
今まゝ信昌より経るの事
かゝぬ

同年七月城介信忠岩村とせしむるとき
坂地より佐久右太夫村とて比良
信昌と信忠とて三列武節此城と

せし落城以後武節城を比良より
と貞徳信昌よりあまふ

同年八月信昌酒井左衛門尉と偕よ夜草
よりあまふ信長より福とけと信長
信昌よりいひくいとくしをたぬ
あげくかたふをくく今よりいしが名
と武志と物といふなりとなり且律地
字とてび一文字の御勝地を比良
唐切の御城等とたまふ

天正十年七月

大指現のむかへせりしより信昌位濃口より
せむし伊奈郡よりゆき、近宿より
名陣とて後信昌慕原郡と移る

同十二年三月十七日

大指現秀吉と兵とつゆりしより信昌先
登りしとて武郡守と尾列御馬より
たすふ敵を三千余味方ハ所ハ六千
余軍信昌志率と下知しはきりつ

別敵と逃くばり大山北を急しり

逃討く首級二百余と得たり

大指現御感あるとて大一字の御勝地と
きりぬる

大指現開東よりしゆり移ふとて上列え碓
しとひく地とあり

長六年三月

大指現信昌とて移る
加納の城とあり

同日二十年三月十四日六十一歳歿す
法名道安

昌勝

九十郎

長二年二月十七日二十五歳歿す

家昌

九八郎 後大膳左衛門守 生國同前

母付

大権現の御女盛徳院と号す

天正九年十二月家昌十五歳歿す

大権現の御女と号す元服此字

と号す家昌と号す守家此御女及

此鷹と号す

又禄四年一 後五位下一 叙す

長六年正月野別守部左兵衛

賜指しとす

長二年 菅沼小太郎半兵衛の子となす
之別 志井と成す

同七年 松平氏とす

加納の城 十万石と成す

同十九年 十月二日 三十五歳なり

卒す 法名 常宗

忠隆

飛騨守 生國 忠隆 加納と成す

元和七年 忠隆 十歳なり

仁徳院殿 乃 御殿なり

諱の字 成す

在文字 乃 湯腰地を給す 則 堤也 位

下り 叙す

寛永九年 正月五日 一 廿五歳なり

卒す 法名 宗功

忠明

下総守

母より

天正十六年忠明六歳より後府

より先皇治と同く

大指現の忠明子となり松平氏より

文禄元年忠明十歳の時上列小幡

ときより

名徳院殿御障の字ときより

安永五年四月位下より叙

下総守より任じ

同辛開ヶ原合戦の時

大指現より

同七年小幡より改め三河を

より改め地より

同十五年

同十五年

乃城より

同十九年冬大坂陣より

元和元年夏大坂平乱の事は
大和口の先手一軍水野日為と
乃士守正の所と二軍なるは
其但中比士とれり所と三善忠の
従と率と進又月五日比晩國分
より六日乃あけがの比大坂比敵兵
後友又兵束等國分南より登陸
と敵討り忠的独兵と率と山
登敵と相戦ひ大坂城破る首級と

得て敵討走と忠的進と通明寺
よりあまの敵と破登甲よりあまの
敵兵城より走り出よ登升寺比
およより其田左衛門作兵と相戦首
級と得る同七日の合戦より忠的兵
あまの首とあまの首は日大坂城を
同辛六月 大坂よりあまの山
と改大坂乃城とあまの首と
同辛年

名流院殿の約命と敵り大坂と政和列
那山の城とき後りり十二万石と成と
寛永三年八月恒口位下に解侍候
り候と

同十六年

將軍家乃名命よりるに那山を改
揚列姫珍の城と成りり都十八万石
と成と

如

大久保加賀守忠常が室同加賀守忠任が
母 母おと

忠臣

英化寺 生國下野守都文 母八本多
中督太捕加勝がむしめ
元和五年十月守都文と改く右河
りりりり一万石御加増と成りり

同七年十四歳よく

名徳院殿の御ま衣え々々元服げんぷく御ご諱なづな此こ字あざ

とと々々々りりりてて忠ちゅう信しんここ号ごうととすすかからら

位い下げはは叙ぎよ一い文字もじ此こはは勝かち地ぢをを

ききららぬぬ

同八年忠信ちゅうしん古こ河が々々又また宇う都つ々々

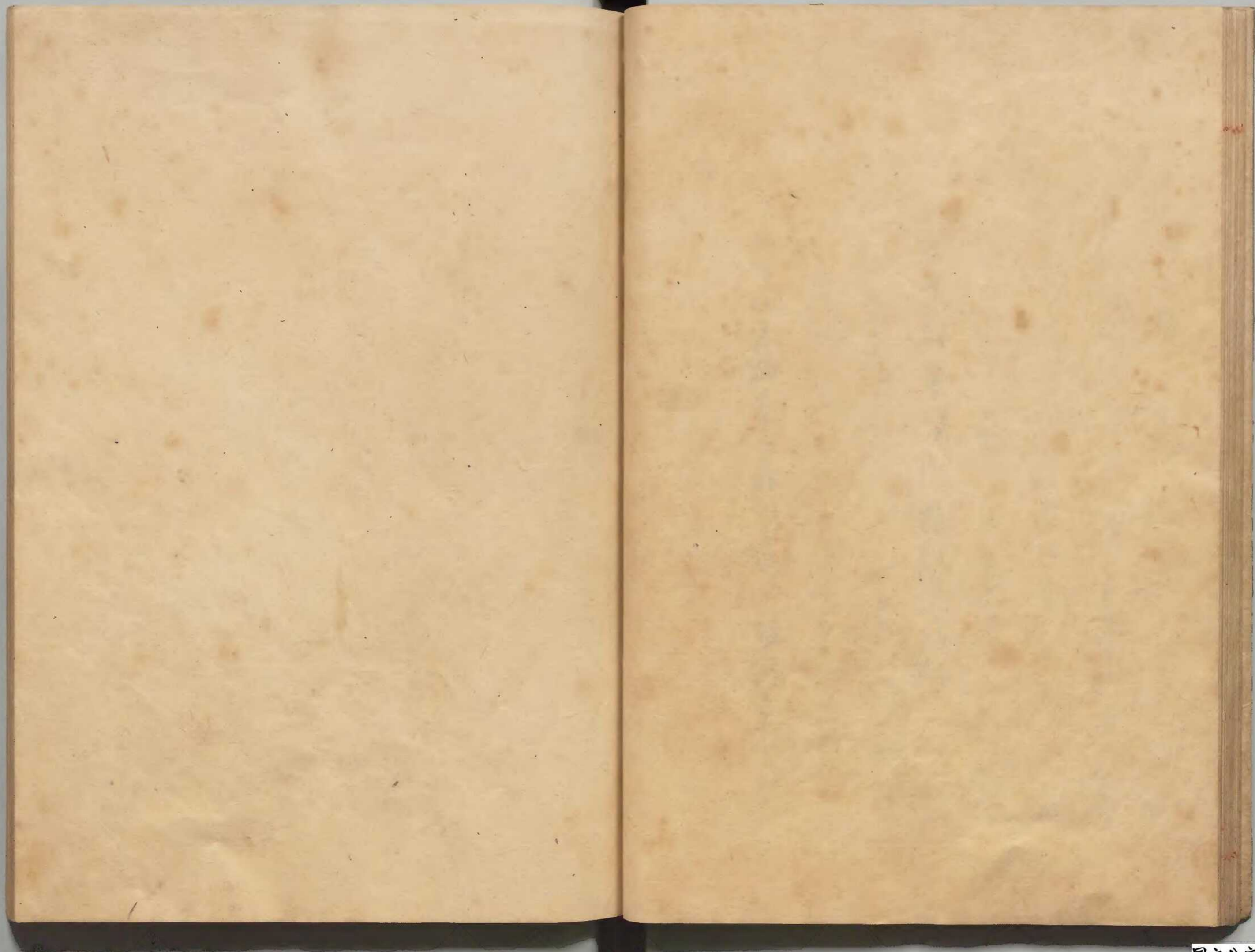
々々々々元もとのの々々々々十一じゅういち百ひゃく石いしとと依よ々々

寛永十一年九月かんえいじゅういちねんくわがつ位い下げはは叙ぎよとと

如

堀尾山城ほりおのやまじょう忠信ちゅうしんのの室むろ母ははおお々々

家いへ乃の級きゅう軍ぐん配はい因いん扇せん此こ中ちゆう松まつ竹たけ



土屋

清之介平兵衛の後胤中村宗平が
 子宗遠乃後なる宗遠相列土屋と
 成りしなり始々土屋と号す
 のら宗遠よりつら武田信虎より
 従ひ浪人となり京師より移りし
 こと土屋此系譜と先祖の菩提所
 皇別大平の御真光院より移す

● 宗遠 むねと

其後の院滅亡り及子系譜終
失と成り今過去帳入りとす
と考く中道とのこと

三郎

たりのの たりのの 八代の孫なり

源乃頼朝より後之々軍功あり

宗光 むねみつ

光時 みつとき

新三郎

源三郎

遠經 とと

貞遠 まこと

三郎

新左衛門尉

貞包 まこと

右衛門尉

貞氏

右衛門尉

宗将

新三郎

季遠

侍中守

通遠

平右衛門尉

法名月心

宗弘

平次 法名慈庵

宗貞

平右衛門尉

明徳年中山城より上りて討死す

時より一族も又おのりて討死す 法名

利宗

氏遠

平三郎

後豊前守と改む

父宗貞討死の後武田家より属す

法名宗憲

女子

武田信長が妻

景遠

忠言奉 後後守と改 生國甲斐

法名宗順

勝遠

傳左衛門尉 生國同家

大永二年甲列よとひく死す

六十 法名正圓

信遠ふと

傳助 後刑部少輔之改 生國同お
母ハ武田信昌たけのぶの女
武田信虎のぶとらより屬まが一いつ方はた此こゝ備そなと守まもり
大永四年位列しんりよよししひひくく討う死しせせり
三十六 法名常心はうしん

昌遠まさと

傳助 生國同お 母ハ武田氏たけのぶの女
武田信虎のぶとらの先陣せんじんになりて殺ころすたりしり
天文年中てんぶんになりしり 浪人なみのりになりしり
と去い後ご列りよよししりと去い昌まさ遠とをと去いしり
後ご不ふ去い後ご光ひかり源げん院いん義ぎ輝き信のぶ虎とらと京みやこ部ぶ
りりととむむるる昌まさ遠とをと去いしり
去いるる昌まさ遠とをと去いしりととむむるる昌まさ遠とをと去いしり
義ぎ輝きののをを知しれれ者ものとと較くらべべるる者もの
わわりり時とき昌まさ遠とをと去いしりととむむるる昌まさ遠とをと去いしり
信のぶ虎とらにに逆さかりりてて昌まさ遠とをと去いしり

よありおまきとんく則彼凶徒二人を
討捕義輝おまきと周く書をよやく
重とをぬりり且桐の紋と信虎は
いしく梧桐樹下よ升とありつくり
いじりなりして升の字は紋と書遠
よはふあり三石をれ紋とありあ
く升の字乃紋と用ゆ
信虎國より帰る時書をよやく
信虎は列よとひく死去乃後書を

高野山一りのり
之後皇別大平の御真光院と先祖
乃菩提所とかいへ又おまきに
天正三年去光院よりとひく死
歳五十八 法名實則

圓部

生國後河 惣檢校祿 母片菅派
新八郎が女

土屋ノ政々々伊豆と号々々幼弱の時父
昌を佐虎一々々從ハ在京の周々々急都
目育母と同意別升伊豆一々々一々々
外留々々々一々々部々々々一々々一々々のち
後列一々々一々々一々々時
大権現の命とがゆ々々一々々 御花一々
勅仕と一々々一々々一々々今川氏真の
所々々一々々一々々圓部と氏真一々々一々々一々
後々

氏真と

大権現と不和の時氏真の一々々一々々小田原
一々々一々々一々々一々々一々々圓部と檢校
一々々一々々一々々一々々一々々一々々一々々
一々々一々々一々々一々々一々々一々々一々々

大権現一々々一々々一々々一々々一々々
永祿年中

大権現氏真と不和の時升伊豆乃三人
大権現一々々一々々一々々一々々一々々一々々一々々
一々々一々々一々々一々々一々々一々々一々々一々々
一々々一々々一々々一々々一々々一々々一々々一々々

よりわめて三列に奉りてめ家の事
と圓都は若くはつとまはる部升伊
若より立咄く彼若共が逐若とま上
若く小田原よりかへるま後若派
新八郎清書は摺紙と升伊若れ三
人の若り傳へ逐りて味方より
天正十八年小田原落城して小糸
良政死り候とき小糸の一族二人
及圓都側侍と

大指現圓都としてとあることおぼしき

升伊若部は捕は修く糸部と城は
よひさしむけ時良政より辭せり
頗勺と誦して圓都は若り逐り
若きとおと朝比奈左をとりて糸部
が家と守りてめやめり事なつてむ
ま後 釣命よりして若く糸部
石田治部が捕は成謀叛のとき使を
海守は流りて一族の同系あり

者とある一て沙汰と圓部が一族較多
同系一ありある紙字と急部と作
と書子と大坂一りはた一しへき
旨較度一り及といへども圓部き
あまのさ急部が一族武列忠此城
成田氏人質となつて大坂一あり
と圓部をろつていひおしそつ
一玉町中の人仕事と書く石田
は書つたなり書と玉門戸とつて

守りあつたといふも圓部並よあつた
大権現石田と謀伐一して後大津一あり
後ふこま急部

大権現一りお陽一りそつて
ありく白銀山表衣おしむり
長十八年大久保石見と清勘氣を
討つ時石見が宅一り警士のお入
と沙汰あり然ども急部並一り出入
せじくお檢校となつて若々の家一り

お入せハ至罪を打もつらん今至純なる
しと感しとく至罪と教ふる 約命
よらるるく江戸よまなり

台徳院殿及

將軍家一福一をくまなり白銀

呉服おと好飲一々帰海と

至後まゝ江戸よまなりまみえしとく

ま川に白銀呉服と好飲と

浄入海しと福一とくま川に白銀

浄服と淨飲と

元和七年十月廿二日山城一とひく

列々歳八十一 法名誠如

和貞

左門 後中吉兼と改じ 生國山城

母ハ胡比奈後河与ガ女

長文長十七年西九一とひく

大権現とひ

と相願と

翌年

名徳院殿

將軍家より諸士六十一人とほりし

とき、知貞も在りたり

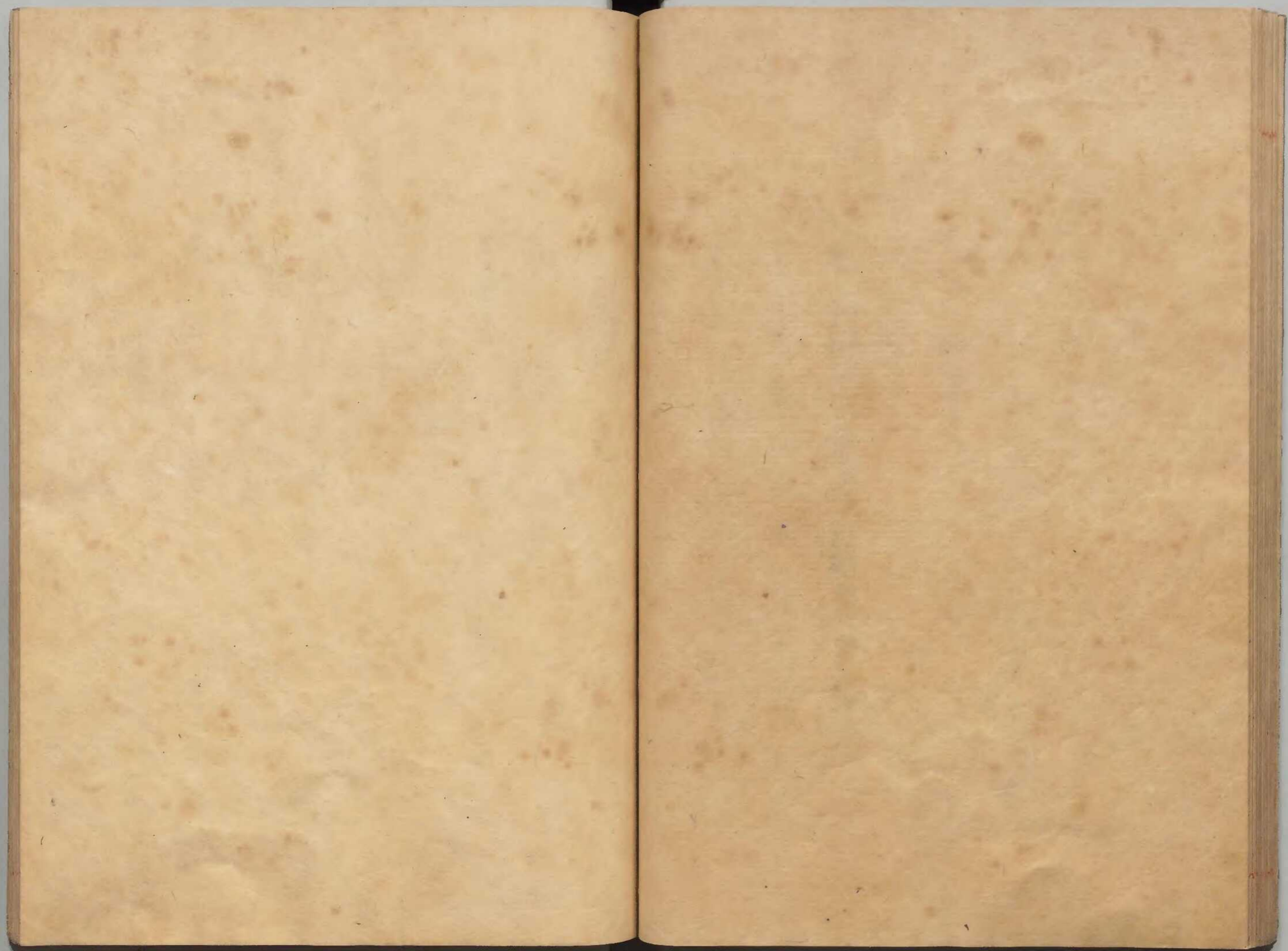
同九年

將軍家御入浴のとき、知貞侍

寛永十年、此加増とあり

同十一年、御入浴のとき、侍

家乃級 三石 後升字 政



● 正家

土屋

在左兼つ耐 生國甲斐

武田信玄乃勝頼 下は

天正三年長篠合戦 乃時曰 十歳

あゝ討死

正久

源三 生國回お

甲別 没落の後

大指現り 福一 ありまら 竹地 後

筑紫名護屋陣に 供奉 後

名護院殿より 後 あり

長五年 開ヶ原 陣に 供奉 又

將軍 あり 後 あり

寛永四年八月廿一日に 死に 歳六十二

法名 善正

正吉

半田部 後 生國 武藏

長十九年十月

名護院殿より 福一 あり 同月

大坂 陣に 供奉 後

將軍 あり 後 あり

正次しげつ

勘左衛門尉くわんざゑもん 生國同家なまくにどお

元和九年

將軍家しやうぐんより福ふく一いっつつくくままりり

寛永十四年かんゑいより水みづ高たかとと陸りくととりり

領地りやうぢととりり

家乃紋いへのみぎ 丸まるの内うちより石いし高たかととりり

● 室政 むろま

讃岐守 さぬきのまもり

生國軍督 なまくにぐんかむ

武田信玄 たけだのしんげん 子 こ 信俊 しんしゅん

法名西雲 ほふなにしうん

土屋

政成 まこと

古澤門

生國同家

十三歳より武田勝頼より後之甲斐
没落のち民間に幽居す
寛永十二年六月廿二日一死す
七十四歳

政重

長三郎 生國 茂茂
寛永十六年十一月十八日十四歳より
〜〜〜

政久

將軍家より後之甲斐に
長次郎 生國 同お
寛永七年十二月十五日
台徳院殿より福一より後之甲斐に
十四歳
同九年より
將軍家より後之甲斐に

家乃紋いえのいもん 九くの内うちノ風車かぜぐるま

四十一

土屋

● 虎次こじ

全丸ぜんまる若杖守わかつまもり

生國なつくに甲斐かひ

武田たけだ位ゐ虎こ一いち一いち一いち

集あつ

古藩ふるはん尉ゑう

武田氏より清ふ
長藤合戦より清く討死

某

惣務

甲列より清く見古澤の村を治
と清く

虎者

筑前守

生國同お

惣務古澤の村を治るに虎者後列

清水より清く見古澤の村を治る

信玄の弟は兄弟三人より金丸

と政と土屋と称す

甲列没落のち

大権現より福より清く見古澤

正備

惣八郎

名徳院殿より後之人々之まじり
元和六年六月十一日いさ病い死し

正真

元和六年六月十一日 生國武苑

元和六年六月十一日

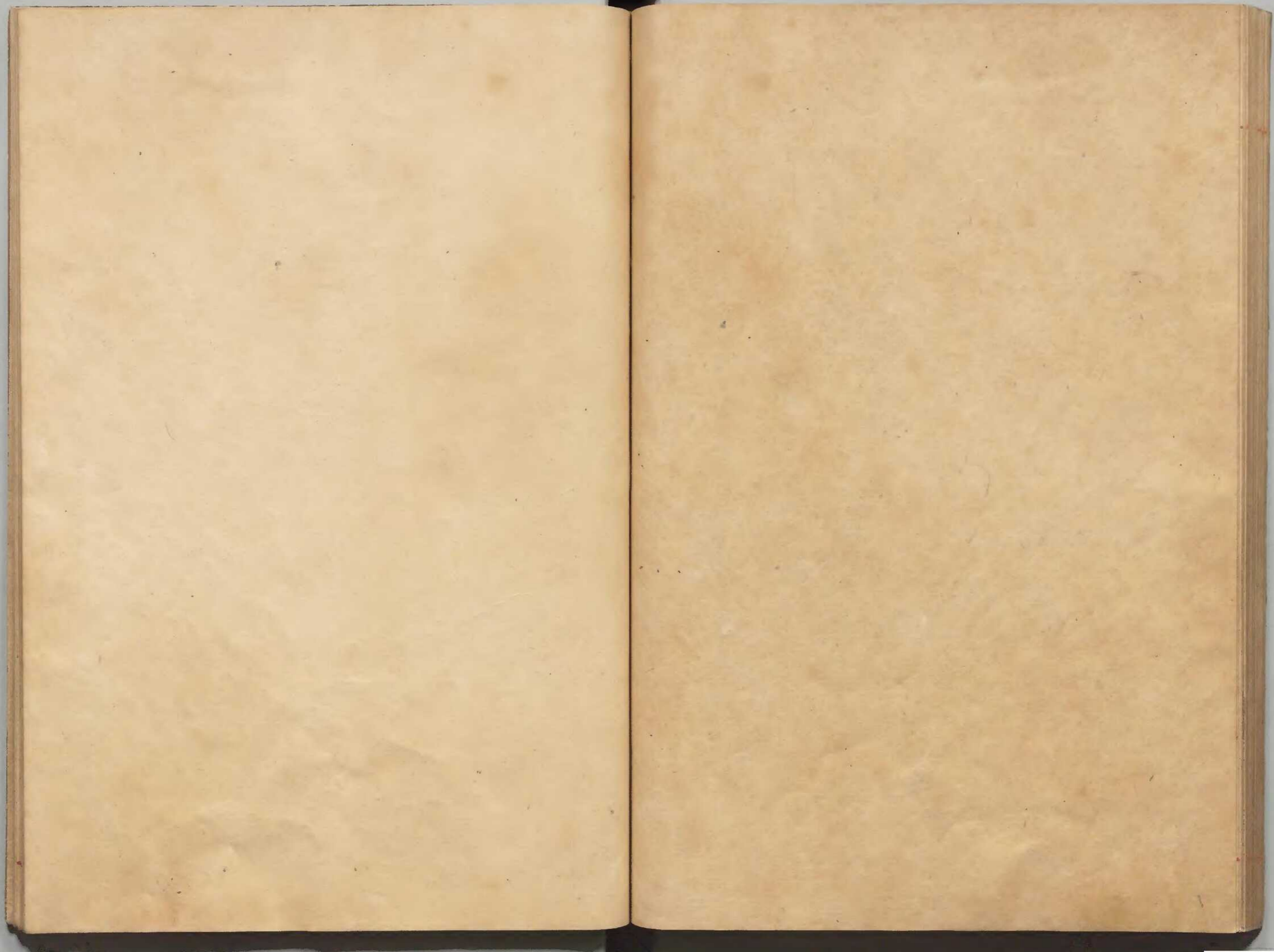
名徳院殿より後之人々之まじり

同八年後列いさ徳とくとと徳とく

寛永十一年いさ徳とく

将軍家より後之人々之まじり

名乃故いさ徳とく



● 某

土屋

地志系尉

廣志卿
一
氏
子
其
氏

重治

地志系尉

生國系河

大権現より一法之しそくまのり
永禄七年正月十一日冬列和由り
よひく一向宗一擧のよき銭ひる
歳四十五

重信

甚助 生國同家

大権現より一法之しそくまのり
元龜元年六月廿八日江別横山合戦

よりよひく病と叫ぶ婦ると八ヶ岳
遊り討死歳二十七

重成

権太左衛尉

大権現よりよび

台徳院殿より一法之しそくまのり
享長十六年七月に死に歳四十八

重正

権十郎

名徳院殿とよむ

將軍家より信之とてまゐり

重吉

半三郎 生國武藏

実之加後勤大橋つ耐り次男なる重正

重吉

將軍家より信之とてまゐり

石の地とてある

重利

甚助 生國冬河

大権現より信之とてまゐり

天正八年八月二十四日三列小山戰場

よとひく疵之をたかしゆり

討死の時より一廿五

利清

忠次郎 忠右衛門 生國同前

長元元年石州

台徳院殿と前

と後

同五年其田陣の

御膳と後

大坂の陣

寛永二年領地

將軍

同八年川船

同十七年六月十六日

六十三

利次

忠次郎 生國武義

寛永十年

將軍家子福

の書と信と心

——しんまうのり水小性組

家乃紋丸の内三石

●
昌清

土屋

次郎三郎

生國甲斐

武田信玄いけだのしんげんより一信いしん之の名習なまなるゆへ

多おほく劫えき氣きとあり

永祿四年えいりくしゅうねん信玄しんげん謙信けんしんと川中かわなかつ嶋しまより

よひ々々合あ戦いくさのとき昌清まさきよ三十九みそひ歳さい

あゝく討死す

昌忠

加賀守 生國同あ

信玄一 信之小姓 なるに後勝頼
よつふ余よるもく 信列深志城二
九一あり七十三歳ありて病死

昌吉

三郎大善 生國同あ

勝頼一 信之勝頼甲列新府と去
て同本郡内一 信之んことり家
とき昌吉信之 善光寺よつる
勝頼昌吉一 謂くいし 汝信列よ
おのむき昌忠がしおと求むる
夏一 といひく昌吉信列よむしき
是と信之 信之の時勝頼甲列東郡
天目山の藤田野一 といひく自殺す

此れらも留者浪人にならむ山家
より飛と

天正十年

大指現甲列水入國のとき武田氏より
はるしめるとき各四里より
しむされよるまゝ留者もあつ其
舊領の地より切るとき小田原より
小糸左衛門大次郎大將より甲列
東郡三坂神と出え黒駒よるせむ

はとれ留者いませ

大指現と好し
小糸氏の共とゆせよたるつひ大草
左をならしり留者も又つと
負うらち鳥飛者古忠門元志件乃
しと

大指現乃高岡よ達と是よりめされ
てはるしめしむる
豊年大久保新十郎 御命と承る

昌者一ノ謂くいふく不依の地は
登一とたり水朱平今よとひく
取持と

同十二年長久手陣に依りて
敵兵とらりしなり

同十八年小田原陣に依りて

同十九年奥列陣に依りて

中河原

長久手年七月十一日江戸城を丸く

とひく

大指現乃鈞命と依りて使者となる

二十一人昌者もまゝの一人なり

其地一黒五文字の書物とて

今一とひく取持と七十九歳なり

病死

勝正

市並 生國同お

十五歳乃て子、江戸よとひく本多
作清とて奏者や

大権現とて一々くまつり十七歳

くまの流るるまつり

其又長又年開て原水陣に供なす

大権現清須りて還るるまつり

釣命とてあつて川産る長束の流るる

經より一水産とて流るる

大権現伏見よ水産のとて大水産を

まつり三經となす時り勝正松平

石見と經りて

同七年八月方大和國りて

とくくくくり部六百石とて

同八年十月二十日 釣命よ

江列國廻る事とて

同十九年後府りて

大権現の水産りて

大権現の水産りて

元和元年大坂の陣五月五日

大指現二条城とおき守り時経以石見守

落馬し一才神ふふとこれゆへに供奉

せし勝正松平おき守水野弾正忠篤が

指揮をたしごまふきの旨 厳令と

あがりて供奉

同月八日

大指現京都へ正攻陣乃とも勝正供奉

大指現豊御の後江戸よりおりし

台徳院殿より後へおきまうり松平

をお守りし

同九年

將軍殿より後へおきまうり

寛永七年正月十日 台令

よるまじく使はるこたうり

同年十一月廿六日 厳令より

使はるこたうり小田原の城に頼家母屋

より

同十年 教令
志摩國鳥羽城と内返伊賀守
一り

同年八月十九日

將軍家の出ありしに 約命と敵て

同付こたなり

同十月十日使わして 高橋

むき城およそしきく 落るし 才祐

自中なごご 安房大京をい事よりて

先中よ 遠とく 大越より 意松 孫又 康乃

事りて 出れりり かり 勝正 江戸

かへふ

翌年正月 河野 湯治 此

徳和りり おりむき 同四月八日 江戸

ころり

將軍家と 相し

同十三日 約命と けく 後府 此所

なごご ことなり

家乃紋石

